



TITLE:

日本[海]々岸に於ける砂丘上の遺跡

AUTHOR(S):

[梅]原, 末治

CITATION:

[梅]原, 末治. 日本[海]々岸に於ける砂丘上の遺跡. 地球 1925, 3(1): 176-187

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182803>

RIGHT:

岸に比して更に悪い港であつたに違ひない。

併し北岸カンデヤの灣に近く古へのクノソス (Knossos) が榮え、南岸メスサラ灣に據つてフェストス (Phaestos) が起つて、希臘以前のミノス文化の精華が此處に發達したとすれば、矢張り東方埃及其他の文明諸國からの交通が此の哀れな海岸の港によつて行はれたのである。カンデヤからクノソスの宮址を訪ひ、更に馬を走らし

日本海々岸に於ける砂丘上の遺跡

梅原末治

一 日本海岸にある史前の遺跡には彼の越中の氷見郡大境にある洞窟の如き特殊なものがあつて上代に於ける我が國に稀な洞窟の住居事實を示してゐるのは學界に著聞する處である。然し乍らそれは從來見出された殆んど唯一の例である

て南プリオリチ(イダ)の分水嶺を越え、メスサラの平原を望見して橄欖の叢林の波だつてゐるのを眺めわたした時の心地は何に譬へようか。フェストス、アーギヤ・トリアダの遺墟の麓、ミトロポリ川ボタモスの清流の畔、夾竹桃の花の優しく咲いてゐる蔭、衣洗ふ村嬢の姿は正に一幅の風景畫である。あゝ私が畫家であつたならば。(終)

から、これを以て同地の遺跡を特色づけることは固より不可能である。かゝる點からすると、本州の日本海岸―特に西半に於いて目立つ處の特徴のある遺跡として海濱に近い砂丘上の遺物散布地を擧げる事が穩當であらうと思ふ。是等の遺跡は當代の文化を表徴する石器と土器とを

發見するのみならず、同時に銅鐵で作つた小金屬を併せ存する點からも珍らしいものと云ひ得る。尤もかゝる砂濱上の遺跡存在は上記の地域に限られたわけではなく、北九州では筑前の糸島郡松原の海岸や、淡路國三原郡松帆村等にも見出されては居るが、日本海岸のものに著しい例が多く、且つ同地方は今こそ裏日本となつてしまつたが、上代にあつては大陸に面して其の文化流入の門口に當つたと思惟すべき理由が多く、従つて如上の遺跡の示すところは本邦文化の發展の研究に緊密な資料を提供するものとして特殊の價値を有することが考へられて、考古學上看過すべからざるものがある。で私は本誌海岸號の發行に際して、此の種の遺跡と遺物とに就いての見聞を録し、それから年代に推測を試みて末尾に遺跡と砂丘との關係を一言することにした。

二

さて日本海濱の砂丘上から史前の遺物を發見することは、其の由來の甚だ古いものがある。

日本海海岸に於ける砂丘上の遺跡

即ち「續日本後紀」卷八、承和六年十月乙丑の條に、

出羽國言、去八月廿九日、菅田川郡司解懶、此郡西濱達府之程五十餘里、本自無石、而從今月三日、霖雨無止、雷電鬩聲、經十餘日、乃見晴天、時向海畔、自然墮石、其數不少、或似鏃、或似鋒、或白或黑、或青或赤、凡厥狀態、銳皆向西、莖則向東、詢于故老、所未曾見、國司商量、此濱沙地、而經寸之石自古無有、仍上言者、其所進上兵象之石數十枚、收之外記局。

とあつて、明に砂丘から石器を見出した事實を録して居り、また「三代實錄」卷四十六、元慶八年九月廿九日の條に

出羽國司言(中略)七月二日飽波郡海濱雨石似鏃、其鋒皆向南。

とある記事の如きも同じ古い文献と見られてこれから既に早く平安初期に其の發見のあつたことが察如せられる。中世となつては記録缺けて徴するに由ないが、下つて徳川時代の半ばを過

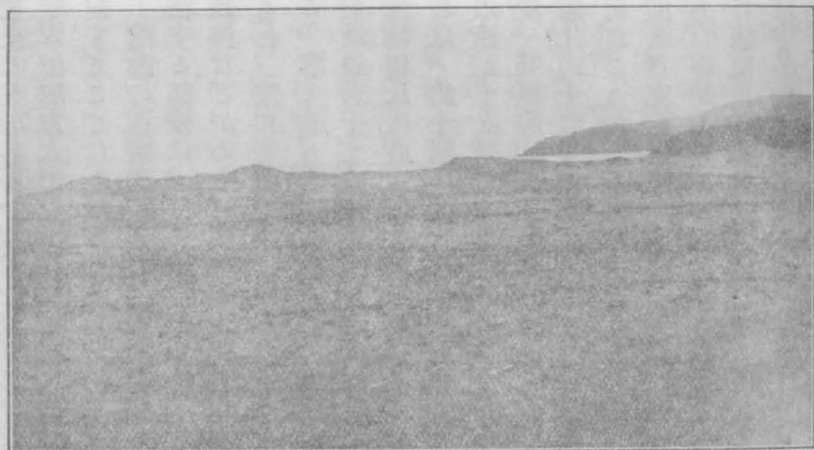
ざると、木内石亭の雲根志に遺物の發見を録したものが現はれ來り、更に明治に入つて同種の

遺跡が學術的に研究せられることになつて、今日では同海濱の砂丘上の遺跡として世に知らるゝもの甚だ多く、一々枚舉すべからざる程の數に達してゐる。(東京帝國大學理學部人類學教室編「日本石器時代遺跡遺物發見地名表」參照)けれども是等の中で特に著しい類としては、北東にあつては舊北陸人類學會同人の探究した加賀の海岸の遺跡が最も顯著のものであらう、西方に於いては丹後の函石濱と因幡の濱坂から湖山村中ノ茶屋に亙る千代川の河口の兩岸に亙る砂丘上の遺跡に先づ指を屈することは何人にも異議はなからう。以上の三者の中で加賀の海濱の遺跡はまだ實踐の機會を得ないが、丹後と因幡とのそれは該地方の史蹟調査の事業に關係を持つてゐるところから、親しく踏査して特殊の興味を感じたものである。そして前者も幸に上田三平氏の結構な調査報告が石川縣から公刊せられてゐるので其の一斑を知ることが出来る。で

次に簡單にそれらの遺跡の狀態を挙げやう。

三

第一に加賀の遺跡は同國河北郡の内灘村字大根布及び向粟崎を中心として、此は能登の羽咋郡大海川の川口に及び、南は石川郡倉部に達する延長約八里の廣濶なる地域に亙つて存在し高さ七八間より二三間までの起伏した砂丘上の傾斜面に遺物を散布するもの、發見品としては石斧・石鏃の類と共に繩紋、彌生式兩系統の土器があり、また時に銅鏃、鐵器、玉類等を見出すことがある。石器土器の發見例は非常な數であるから、こゝには省略するとして、銅鏃は現在の北部の羽咋郡大海村二ツ屋と向灘村粟ヶ崎とから石鏃と共に出土遺品が保存せられてある。そして大根布にては砂丘の内側の斜面に一部分土器片包含層の見ゆる處があり、また小鐵片の類は今も石鏃や土器の片と共に點々砂丘上に遺存してゐるとは實地に詳しい上田三平氏のかたるところである(據上田三平氏編著「加賀能登ノ古代遺跡」石川縣史蹟名勝調査報告第一輯)。



丹後村浜石濱の遺跡

次に丹後國石濱の遺跡は熊野郡湊村の内にあつて、東より西に突出以て久美濱灣を抱く大きい砂洲の基部に位し北方日本海に面した

ところのこれまた廣い地域を占めたものである。主として遺物を發見する部分は嚮に内務省から史蹟として指定せられた東西八町、南北五町に互る面積四十四町步ではあるが、昨年に至つてこれから東につゞく砂丘上、約一里以上も距つた竹野郡濱詰村で全く同一の遺物が同じ状態で發見せられたところを見ると、上記加賀の遺跡と同じく附近一帯に互つてゐるものとも解せられる。それは兎も角として本國石の遺跡は明治二十年の頃久美濱町の故稻葉東園氏がはじめて見出したもので、爾來同氏並に織田、青木等地方の熱心家の手で石器、土器の外、銅・鐵の小形鏃、錢貨、玉類等の多數の珍らしい遺品が採集せられ、兩三年前にはその一部から箱式棺の發見などもあつて複雑な内容を持つた遺跡であることが明となつた。遺跡を表徴するところの石鏃の類と彌生式土器片とは小形の玉類と共に右の全地域を通じて發見せられるのであるが自餘の遺品に至つては、砂丘の起伏して高低の一樣でない間に自ら出土地に局限があつて、研

究上に興味の多い現象を呈する。で、やゝ長くなるが地方人士の附した名稱に従つてこれを略記することにしよう。

遺跡の西南隅にある稍々高い丘の俗に鐵山と稱する部分は、特に鐵片が多くて、内に鐵鏃と鐵滓などがあり、素焼の土器片や陶質器片も見られ、時に青磁や染付磁器の破片をも混じてゐる。嘗てこゝから貞觀永寶、富壽神寶等の古錢が鐵鏃若干と共に見出されて、前者は今なほ同地織田氏の許に保存せられてゐる。鐵山の東方には、約十間の幅を以て東西に長く、約一町半の廣がりを持つた貝塚と呼ぶ所があつて、蛤、蜆、牡蠣等の貝殻表面に散布し、それに交つた彌生式土器片を現在でも容易に採集出来る。以前にこゝから人骨が出で、また彌生式の特徴の顯著な完全な壺や高坏の類及び錘石等を掘り出した事があり、中央のやゝ溝狀を呈した部分から織田氏は開元通寶はじめ大觀通寶、皇宋通寶以下多數の宋明錢を發見して、今ま京都大學に所藏してゐる。骨山と呼ぶ地域は右の貝塚の東

方稍々丘狀をした部分一帯を占めて、此の地は表面に多數の人骨片の遺存することが名稱に相應する。もと全骨骼を具へたものゝ埋没が少くなかつたこの事である。

地方人士の製造場と云ふのは骨山の東北にある同じく隆起した部分で、遺物が最も多く本遺跡中の重要な地域である。右の名稱は燧石、粘板岩、瑪瑙等の石片が夥しくて、石器のこゝで作られたことを推測せしむる處から來たものであると云ふ。是等の石片と共に彌生式土器片が表面に多數に散布してゐる。從來製造場から發見せられた遺品には石鏃石劍等の利器、異形の古式勾玉、小玉、管玉及び其の未成品等の裝身具、高坏、壺等の彌生式土器の外に小銅鏃の出土が最も多く、同時に王莽の貨泉二個また出土した(此の以外に他の錢貨はない)なほ鐵片や陶質器片も存するが、極く少量であるとは實地に通じた地方人士の明言する處である。以上の外遺跡地内には石塊の多い處から石原と名づけられた部分(鐵山の北)、貝塚の東端の南方に當り

古く人形があつた爲に人形ヶ岡と云ふ名を得た地點、製造場の東方に白石、新開場等の名稱を持つた處などがある。是等の地域何れも石器土器片を出す、中にて製造場と白石との中間にある俗に大窪と云ふ窪地から後者に互る部分には石鏃、銅鏃とが發見せられ、また嘗て一個の縄紋土器を出した。これが本遺跡出土の唯一の同式土器である。

序に擧げるが竹野郡濱詰村に於いて新に檢出した遺跡また函石とほゞ同一の状態にあつて、起伏した砂丘の表面に遺物を散布して居るもの發見者たる山田安藏と毛呂清春の兩君の齎した遺物には函石出土品と全然同じ形式の石鏃や彌生式土器片があるし、また小銅鏃や鐵滓も見ゆる。

四

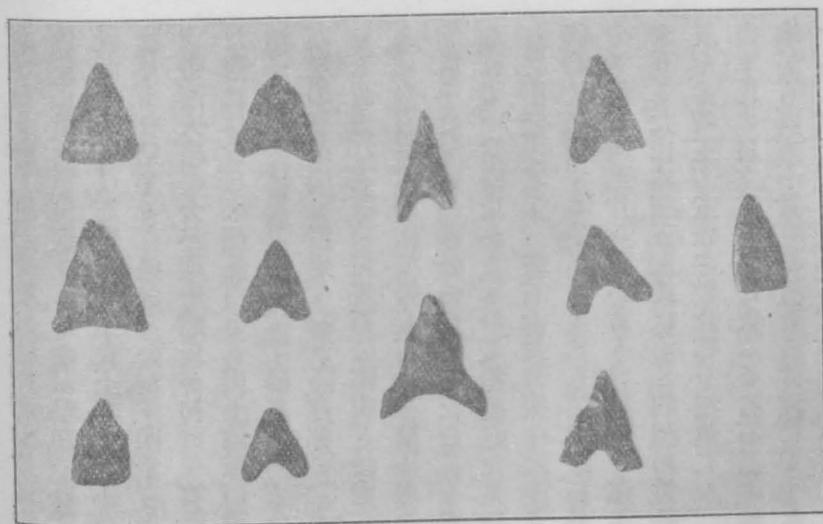
因幡の遺跡は千代川の河口を中心として發達した砂丘にあつて、濱坂のそれは河の東方岩美郡中ノ鄉村に存し、中ノ茶屋のそれは反對の氣高郡湖山村にある。濱坂の遺跡は濱坂新田の東

日本海海岸に於ける砂丘上の遺跡

方から多鯨ヶ池及び服部村に亙つて海濱に近い砂丘に遺物を包藏するもの、現在では單に丘の表面の所々に石鏃、彌生式土器片、小量の陶質器片を發見するに過ぎないが、明治三十一年東京帝國大學の大野延太郎氏が初めて實踐せられた際には、なほ特色のある出土地域が遺存した様子で、これに就いて氏は「砂丘の南方に當つて石鏃の製造場と推定すべき隆起部と、これにつゞく西方に石器の原料石の露出した處、及び東邊に岩石が露はれて恰も石材を缺き取つた様な状態をとめた部分」があつたことを録してゐられる。當時氏がこゝから拾得した遺物は石鏃打磨兩様の石斧、錘石古式の彌生式土器片等石器時代に屬する遺品を主として、なほ外に小形の銅鏃と鐵鏃片などがあり、後中ノ郷小學校に奉職した山本三五郎氏は右と同種の遺物と共に異形の勾玉、玉類の破片等を採集した。そして山本氏と足立正君とに依ると打石鏃の類本遺跡地から西方十數町の濱坂の砂濱にも少なからず散布し、東は服部村大字海士の砂原に及び後者

からは石鏃、石斧、鍾石等が出てゐると云ふ。して見れば上記の地點はその中心に當るものとするべきであらうか。

千代川の西方砂濱の遺跡は河口に近い加露村の地内から湖山村を経て西は末恒村の伏野に至る砂丘上に互り存して、東西の延長一里を超ゆる。山陰線の汽車に投じて鳥取から西すると、次の湖山驛に近づくに従つて車窓の北に砂丘の連なるのが見え、驛を過ぎてから暫くの間は湖山池と砂丘との間を走る。砂丘には所々に松樹があつて一種の趣を持つてゐるが、此の廣い地域全部が遺跡それ自體なのである。湖山と伏野との二地が石鏃類の出土地として先づ學界に紹介せられたが、石器と彌生式土器片とは砂丘の隨所に發見することが出来る。そして現在で興味を惹くのは末恒村中茶屋の東方字長者屋敷と湖山部落の北方に當る砂丘との二局部であらう。此の前者は中茶屋から湖山村大字堀越への途中にある盆地狀をした平坦部であつて、四周砂丘に圍まれ、南方湖山池との間にある丘が一番高



因幡中茶屋發見石鏃と銅鏃（右一端一個）

く、全體の地形が如何にも古く邑落のあつた事を想察するにふさわしい。遺物は該盆地の東南部に當り、砂丘の一部に露出した赤褐の粘土層中に含まれたのと東北の砂中に散布してゐるので、主なる出土器には石鏃、錘石、彌生式土器片及び小銅鏃がある。湖山の遺跡の局部また長者屋敷と稱して同村から加露村に亙り、其の宇狐塚附近及び臺場の西方の地域である。從來砂丘の表面から多數の遺物が採集せられてゐる中に抉入石斧、磨石斧、石鏃、タ、キ石、錘石、彌生式土器等があり、また鐵鏃片も出てゐる。

以上は主要な遺跡の概観であるが、この以外になほ鳥取縣内には氣高郡中條村濱村の砂丘に石鏃類の發見を傳へ、また伯耆に入ると東伯郡の天神川口の西方に發達した砂丘にも點々遺物が存してゐる。そして同じ状態はまた石見の海濱にも見られる様ではあるが、此の方面の調査が未だ充分でないから、こゝに詳記し得ない。

五

さて是等の遺跡は其の出土の遺物に依つて單

日本海海岸に於ける砂丘上の遺跡

に石器使用の時代のみならず、金屬器使用の時期に亙つてゐることを察せられる點に於いて研究上甚深の興味を感ずるものであつて、特に其の丹後國石濱の遺跡には年代の明示する錢貨を伴出してゐるのは最も重要な事實である。こゝに於いて如上の諸種の遺物が相互に如何なる關係を保つてゐるか云ふ遺物そのものを正當に價值づくる事項に對する關心が生ずるわけで先づ第一段として吾人の注意に上るのは發見の各種遺物包含の層序如何にある。嚮に私が丹後の國石濱の遺跡を踏査して小發掘を行ひ、また濱坂の遺跡を訪ふて處女層を探つた如きは一重にこの究明にあつたのではあるが、如何せんそれに就いては、遺跡が何れもたへず異動する砂丘にあるが爲に早く埋没層序が擾亂せられて終つて大部分遺物の散列地と化し、單に加賀の大根布や因幡の中茶屋等海岸を去るや、遠い地點の砂丘の下に少許の彌生式土器の包含地を遺すの外、各種遺物の關係を見る様な原形をすべて失つてしまつてゐるのは遺憾な次第である。

既に遺跡層序よりする遺物相互の關係尋ぬべからずとした場合第二に來るものは、云ふまでもなく遺物自體に則する形式の比較考査であらねばならない。是れに就いて着目せられるのは如上の遺跡を通じて見る三様の質料の鏃に於ける形の一致と思ふ。一體是等の砂丘地から出土する銅鏃は何れも共通の特色を有するものである。即ち函石濱發見品が代表する如く、形小さく、式は單なる扁平なる三角形と莖のある同式との二者に限られて、共に打製石鏃に通有なる二大形式に對應するもの、右の點に於いて支那の漢鏃や、また我が内地の古墳から時に發見する銅鏃とも趣を異にして、一見如何にも古い感を與へる類である。鐵鏃にあつても、またほゞ同じ特徴を具へてゐて小形の扁平な三角形のものが多い。此の事實は觀者をして自らかくの如き銅鐵鏃の形の基くところ同時に發見の石鏃にあることを想定せしむると共に、また本來石器を使用し來つた者が新に該金屬を獲た當初の所産とする推測にも導くものである。近重博士の

分析せられた結果に依ると函石出土の小銅鏃の質料が純銅に近いと云ふことであるし、また既述の如く遺跡に小鐵滓の散在してゐる事實の如きは右の想察の當れることを裏書きするものと見られる。

更に轉じて是れを當代の日常の用器である土器を對象とするに、加賀の海岸には若干の繩紋土器片の發見があり、また函石にては一個の游離した同式土器が見出されてゐるが、それ等を除くと、すべてを通じて最も量の多いのは所謂彌生式土器であつて、山陰の遺跡は從來の發見品が全くそれに限られてゐる。これは遺跡をのこした民衆の原日本人であることを物語る有力なる證左となることであるが、そは兎も角として是等の發見の彌生式土器は關西、九州の石器時代の遺跡から出る狹義の同式土器の特徴の明なもの——幾何學的文様を施し且つ製作の古拙な類——が多いと共に他方文様なく精巧の度を加へて後世の祭器に見る素焼に近い類があり、また既に舉げた如く一部分に陶質容器の存在を

も認める次第である。

果して然りとせば兩者の連系から、こゝに我が國の該地域に於ける石器時代から次の金屬使用の時期に互る利器容器の上に印して文化發展の徑路を推し得ることになる。そして右の推移の考察を更に價值づけるものは丹後の函石濱遺跡に於ける遺物の水平上の分布の相違であると云はなければならぬ。同遺跡は吾人の調査に依ると全地區すべて散布地と化してしまつてゐるが、既に述べた如く、廣濶な地域の間に自ら局部に依つて出土の遺物の相違が看取せられる。即ち割合に古い遺物、換言すると石器類と古式の彌生式土器とが東方の白石、大窪、製造場の附近に多く、製造場からは同時に王莽の貨泉が發見せられ、また上記の特色ある小銅鏃多數と鐵滓若干とを出して居り、また其處には右の遺跡廢した後に古墳が營まれた。これに對して貝塚からは形の全い彌生式土器が出で、更に鐵山發見の土器片に至つては彌生式中での新しい系統に屬し、鐵滓鐵鏃の類最も多く、伴出の古

錢に上記の本朝十二文錢二種があり、時代が如何にも新しく見ゆる。兩者の遺物の間に表はれた先後と伴出の古錢の前後との合致は、異動し易い表面散布地の現象であるが上に、一方古錢の性質を考へるとこれのみでは固より、其の示す年代を以て直ちに利器容器推移の實年代を想定することは出来ないが、北九州の糸島郡松原の海岸に於ける石鏃鐵滓、貨泉の同出の事實や南朝鮮の金石併用期の貝塚として顯著な金海貝塚の處女層から同じ錢貨の發掘せられた不思議によく合致する考古學上の事實を併せ考へ、また王莽の貨泉の一時限り廢したものであることに思ひ至ると、該古錢の示す年時がその發見の遺跡の年代を物語るものとする可能性が大いに加はることゝ思ふ。かくて函石濱の製造場の示す如上の事實から王莽の貨泉の作られた西暦一世紀が恰も我が石器から金屬器への過渡期の一點を指すとの推測が成立つことになり、引いてまた同じ遺物を見る日本海岸の上述の砂丘の遺跡の年代の一點また想像せられるわけである。

西曆紀元第一世紀に我が國がなほ金石併用の時代にあつたと云ふ此の推測説は一見甚だ奇異の感と與ふるなきを保し難いが、今や著しい進境を示した本邦考古學研究の業績から顧みること決して驚く可きことでないことが察せらる。而して這種の砂丘上の遺跡が特に日本海の西半の部分にあることは金屬利器として小形の銅鐵鏃の並び存すると共に更に進んで金屬の使用の據つて起つた處の大陸文化の影響にあることを暗示し、また同種に我が國に特に青銅器時代と名づくべき時期の發生せなかつたのを物語ることになつて感興の特に深いものがあり、遺跡の重要さを大いに加ふるわけである。

六

以上私は主として考古學上、特に上代文化の推移を考察するの立場から右の砂丘上の遺跡の年代を考へ性質の一部分にも論じ及んだのであるが、翻つてこれを地理學の上から觀察するとしても、這種の遺跡はまた興味の多い研究の對象であることを信する。尤もこの考究には同地

砂丘の成因發達其他の性質に關する充分な知識を必要とする。右の點では幸に友人小牧文學士が前年來如上各地の砂丘に亙つて基本の調査を進めてゐられて、本號にその一端を發表せられるとの事を聞いたから、同氏の高説に教へられて考察を試みるのを安全とする。然し試みに遺跡を實踐した際一二の思ひ浮んだ所を附記せんか。本來是等の遺跡地は云ふまでもなく古代民衆の住居した處であるから、漁獲を唯一の主要としたと考へられない彌生式系の同民衆にあつては、砂礫のたへず吹き來り、吹き去つて移動する不安定な砂原にその住居を撰んだとはどうしても考へられない。従つて今は砂丘にある是等の遺跡も當時にあつては砂丘からは若干の距りを持つた、かゝる懸念のない好地であつたに相違ない。このことは既に舉げた加賀の大根布や因幡中ノ茶屋の遺跡の一部に見る砂丘下の遺物包含土壌の存在が雄辯に物語つてゐる。然らばかく遺跡の全部砂中に沒し去つたことは、砂丘が北風にあふられて漸次海岸から内へくど

進行した結果に歸すべきこと云ふまでもない。前段に於いて論じた是等の遺跡の年時が當れるものとすれば、そこに自ら日本海岸に於ける砂丘移動の顯著さが推測出来るではなからうか。また遺跡の位置が何れも割合に海岸に近く、而も砂丘は今や遺跡を超へて内に擴がつてゐる状態などからすると、或は海岸線が同じく砂丘と

越 前 東 尋 坊

琵琶湖の東邊から、北東の方向である北陸街道を取り、越前では白鬼女川の谷となつて、遙かに加賀能登の邊までも伸びて居る、著しい構造線があるが、之は北陸では、海岸線と方向が概ね一致してある。此二者の間にある山部にも多數の小さい併行の谷があるし、又越知國^チ見高須などの死火山が南北に列んで在る。此南北構造線は各所で東西に近い、澤山の構造谷で切斷さ

共に内に進んだものではないかとの想像をも起さしめて来る。尤も海岸線の隆起、陥没と云ふ如きは地學上の大きな問題で吾々の輕々に論すべき所ではないが、如上砂丘上遺跡の示すところ或は右の點に接觸すべきものがあるやに見ゆる。試みに記して専門學者の調査を冀望する次第である。

比 企 忠

れるが、其内越前では足羽川谷と九頭龍川谷とで切られた部分に陥落地が生じた、之が福井平原である。此平原は僅に西北隅に於て海に開いてある。一體越前の海岸は山側峻峻で、急に海に臨んで居る所が多く、此狀況は北方山の盡る所即殆んど加賀越前の界近くまで續いて居る。此山の盡る所は福井平原の開く所であつてこゝに三國町があり又東尋坊がある。之より北は砂